

草の迷路

根釧原野

千田三四郎



創林社

草の迷路

根釧原野

千田三四郎



創林社

千田三四郎(ちだ さんしろう)

1922年、北海道の礼文島に生まれ、岩見沢に育つ。早稲田大学文学部国文科を卒業、北海道新聞論説委員を経て定年退職、創作活動に入る。「人間像」同人。

著作『流れの軌跡』(泰流社)『詩人の斜影』(創林社)

住所 北海道江別市大麻園町32-7(〒069・01)

電話 01138・6・8081

草の迷路―根釧原野

一九八二年八月二〇日第一版第一刷発行

定価 一三〇〇円

著者 千田三四郎

発行者 宮西忠正

発行所 (株)創林社

東京都千代田区三崎町二の二の二
電話東京二六五―八〇七七 千代
須藤印刷 大口製本

©SANSIRO CHIDA

0093—0148—4281

草の迷路
目次

第一章 色彩喪失 7

第二章 波立つ原野 34

第三章 茂みの構成 62

第四章 黄金伝説 91

第五章 怨刺数え唄 118

第六章 弾道と青虹と 146

終章 炎の向こう側に 175

あとがき 203

草の迷路

— 根釧原野

第一章 色彩喪失

夫を見送って玄関口に出た真佐子は、「あら、何かしら」と、青く澄んだ西空のかなたを指差した。

「ほら、ずっと遠くのおそこに……」

赤根も見た。藍を薄めてかすむ山脈やまなみのすぐ上に、うごめく小さな茶褐色の汚点があった。それは湧き雲のように広がっているらしく、はるかにかすむ知床・阿寒火山群あかんのつらなりにそって、北東へと流れている。直観的に、けさのテレビジョンが伝えていた十勝岳大噴火のニュースに結びついた。

道央にそびえる十勝岳は標高二〇七七メートル。深夜と未明の二回にわたって爆発し、いままなお無気味な鳴動を続けており、しかも落下する火山弾に当たって硫黄礦に働く作業員五人が即死した、と衝撃的に伝えていた。

西の空にむくむく生きもののよう動くしみは、噴き出た火山塵であろうか。この茶褐色と、水爆実験のキノコ雲が盛り上がり拡散してゆく記録映画と、イメージを二重写しにしてみた。

にわかに絵空事ではない何かの前兆めいた不安を覚えさせられ、赤根はふりかえって真佐子にいった。

「あれは、十勝岳の噴塵らしいな」

「まさか、雲にしか見えないわ」

「いや、確かにそうだよ」

「十勝岳って北海道の真ん中あたりでしょ。その噴火の煙が見えるなんて……。たとえば大爆発だったにしても、ずうっと遠く離れたこっちから見えるものかしら……」

「あそこまで西風に吹き流されてきたんだろうが、動きが鈍く見えても、あれでかなりの速度だ」

「こっちへ飛んでくるのかしら」

「かもしれない」

「恐ろしいみたい。おお、カミさま、ホトケさま、どう致しましょう」

妻はおどけたが、赤根は笑わなかった。上層気流に乗った竜翔のような噴塵が、まだはるか彼方にあるとしても、風下にあたるこの地帯は当然降灰の犠牲にさらされる。新聞記者という職業がら先走った懸念をはたらかさずにいられない。赤根は支局を留守にするのが気掛かりになってきた。

だが、きょうは隣の鉄貝村役場にどうしても行かねばならない用事がある。三選された黒淵忠作村長の初登庁を取材し、そのついでに自分の支局長就任についても挨拶をする段取りで、部下の茶山記者とは前日に打ち合わせを済ましていた。^{こんせん}「根釧原野のサップロ」といわれる奈

賀別町^{かべつ}に着いて四日目である。

赤根を乗せた二輛編成のディーゼルカーは、雑草と灌木の海のような波状台地を横揺れしながら走った。まっすぐな単線軌道。数人しかない客。赤根は、さびしさを感じた。

鉄貝村の駅に降りると、すでに空が火山の噴塵に覆われていた。三十分たらずの間に天翔^{あまがかり}てきたのだ。篠突く雨さながらの灰に、太陽のありかもわからぬほどに日ざしが遮られて、たそがれのように薄暗い。降る質量感が直線的で重たい感じがし、音がしないはずなのにさらさらと聞こえるようだ。大気は汚れて喉にいがらっぽく、温度も低まって肌を脅かす。小鳥たちはあちこちの物陰に潜み、自然の変異を、小刻みに鋭く耳ざわりな啼き声で警告しあっている。

十勝岳からこのあたりまで、およそ二百キロメートル。いっきに来襲したエネルギーと拡散の規模に、赤根は圧倒された。古めかしく大げさな表現で「まがつびのなせるわざか」と呟いていた。

赤根が駅前食堂の電話を借りて支局に連絡をとると、送受器のなかから茶山記者の弾んだ声が応じてきた。

「降灰なら、こっちもボンペイなみです。埋没して化石になりかねませんが、支局長には、かつてこんな経験ありますか」

「ない。灰かぶりのシンデレラには幸運が待っていたけれど、灰かぶり記者には仕事しか待っていないのだ」

「はい、はい。灰については、さしあたり関係機関から畑作や牧畜への被害予想と対策を訊いて送稿するくらいでしうか」

「そんなところだが、本社から別の指示があるかもしれない。出先から所在を知らせることを忘れるな」

送受器を置いて、鉄貝村役場への道順を尋ねた。八百メートルくらい歩くと、ふたもとの巨大な柏^{かしわ}がそびえているのが目につく。その下の軟石の門柱が小さい感じた。

庁舎の正面玄関までじやり道が続き、両側に職員たちが改まった表情で並んでいた。先頭に控えた男に、赤根が、名刺をさしだすと、やはり助役だった。まもなく三選村長が到着するところで、その出迎えだという。

「公約の一つに機構改革があるので、職員一同は期待をこめて整列しているのです」

余計な言葉だったが、人事権をにぎる者の驕^{おご}りを、赤根はその笑い皺に見た。選挙中、黒淵への支援運動をやった役職者らへの論功行賞にならなければよいが、と余計な勘繰りをさせられる。

助役の禿げあがった額にも、職員たちのしかめた眉毛にも、うつすらと灰が積もって、石像群のようだ。

赤根がカメラの視角に適当な場所を捜していると、若い数人の囁きあいが耳に入った。

「庁舎内で迎えたって、どうってことでもないだろうにさ、こう形式張られちゃな」

「このぎょうぎょうしさが、助役には必要なのさ」

「自分は再任されたいが、村長の胸の中は掴めない。だから御身大切におひげの塵払い、いや、きょうは灰払い」

黒淵忠作は、対立候補の元村長である黄田剛市を僅少差の得票で破り、三期目の座を確保し

た。元村長の「いき」のかかった職員は、いまでも役場内にいるだろう。としても、それは派閥なんかに係わりない杓子定規なセレモニーに対する気儘な咄きにすぎないようだ。

やがて、黒の大型乗用車が柏の樹の脇に止まった。玄関ボーチに横付けしないのは、出迎えの式次第を承知しているからだ。助役が駆け寄り、いんぎんに車のドアを開けた。

半白の髪の方が、おもむろに出てきた。赤根があらかじめ新聞の綴じ込みで調べておいたとおりの黒淵だった。

「やあ、ごくろうさん」

黒淵は軽く右手を挙げて、助役の会釈に一瞥をくれたあと、作爲的なポーズで降灰にかすむ庁舎の空を仰いだ。それから威厳たっぷりに居並ぶ職員たちへ視線を走らせた。日焼けした顔つやと、どっしりした体軀には、三選首長としての自負がみなぎっている。特徴のぎよる眼と角張った顎、毛虫じみた鼻下のひげが写真そっくりで、当然のことながらそれが赤根には妙に面白かった。

助役が黒淵の頭上に洋傘をさしかけて、後ろから合図すると、職員らはいっせいに歓迎の拍手をした。その激しさには、待ちあぐねた立ちん坊からの解放感と、灰まみれになった自棄くそな気持ちとがこんぐらかっているようだ。

赤根は、玄関前のロータリーに造型された自然石と真柏の間から、続けざまにカメラのシャッターを切った。薄暗かったけれど、灰にフラッシュが反射すると濁った映像になるので、閃光装置はつけなかった。タバコの煙がたちこめる室内でも同様で、本社にいたとき取材先で同行のカメラマンから仕入れた知識だった。これまでの赤根は、家族との行楽以外にカメラを持

ったことがなかった。支局に赴任して最初に手掛ける撮影だけに、写っているかどうかの不安がつきまとった。

「これは皆さん、どうもどうも……」

黒淵は、職員のひとりひとりを査閲するように、右に左にいちいち目礼しつつ、ゆっくりとじやり道を進んだ。拍手が再び潮騒に似た昂りをみせてひびき、つかのまながら得意の場景を盛り上げた。

灰は依然として降りしきっている。

幹部たちを従えた黒淵がぞろぞろと庁舎内に入り、窓口事務の大部屋を通り抜けて、奥の村長室の前であゆみをゆるめた。すかさず介添えがノックに手を掛けて、うやうやしくドアを開ける。劇的效果はここで極まるわけだ。

ところが黒淵は、室内に一步踏み込んで、とたんにそのまま釘づけになった。

「……や、す、ひ、こ」

信じられない事実を思わず確認しないではいられぬ、せきこんだ声になっていた。が、すぐ態勢をととのえ、立て続けに訊いた。

「どうしているかと案じてはいたのだが、よく出てこられたな。いや、よく出てきた。よかった、よかったな。もう、いいのか」

「なんだか疑わしそうだね」と、室内から含み笑いを押し殺したような返事がはねかえってくる。

「変なことを言うもんじゃない、やすひこ」

「自分で押し込めておきながら、よく出てきた、よかった、よかったはないだろう。逃げてきたんだよ」

赤根が覗いてみると、若い男が村長の椅子にふんぞりかえり、泥靴の両足を大きなデスクのうえに投げ出している。垢じみた開衿シャツに、よれよれの青ズボン姿で、頭髮の坊主刈りが受刑囚を連想させる。ひげを剃っていないせいか、蒼い顔が汚れた感じで、かなり疲れているようだが、まなじりだけは挑戦的だった。

助役らはただ手をこまねいて、その若者と村長とを交互に見つめるばかりだ。

「やすひこ」と呼ばれた感じと、助役らのあいまいな態度から、赤根は彼が黒淵の身内らしいと察知した。しかし、その面長で彫りの深い目鼻だちに、少しの相似点も認められなかった。

職員たちは、続けて行なわれる村長の就任挨拶を聞くために、大会議室への階段をぞろぞろとのぼっていた。黒淵についてきた数人の幹部たちを除いて、こんな偶発事に気付くはずもなかった。

「何をしに来たのかね、心配していたぞ。駄のほうは、もういいのか」と黒淵は、穏やかな口調でとりつくろっていた。

「何しにって、別にこと改まるほどじゃないさ。就任の祝いさ、あたりまえだろう、俺がそれを言っただけ」と、とぼけたふうに若者がいった。

「……にしても、ここはお前に場違いだと思われるがな」

「いや、そのお祝いをだ、死んだ母さんに代って申し上げたくてさ。それで、病院をやっと抜け出して駆けつけたんだが、ついでだから陳情もしたくなかったな、一身上のさ。俺がいたら都

合が悪かった選挙も、どうやら済んで、うまくいったことだし、このへんでどうだろう、俺を病院なんかからもう解放してくれたっていいのではないかと、そんなお願いをしたいな。リベ
ートはないけどさ、哀れな家なき子の気持ちも汲んでほしいな」

赤根は、坊主頭に青ズボンの外見から、精神神経科の患者かもしれないと思った。とすればこの男の挙措が領けないでもない。

黒淵は、男の奇妙な言葉にかかわろうとせず、デスク脇の応接用ソファーに腰をおろした。幹部のひとりが茶を淹れてきた女子職員から盆を奪い取り、テーブルにそっと置こうとしたが、茶碗と茶托とがかたかた音をたてた。黒淵の内心を忖度した緊張であろうが、赤根にはやや滑稽に思えた。

黒淵が出されたお絞りで顔をぬぐうと、それに褐色の灰がついた。茶をひとくちふくんで、「お前も飲んだら」と男に声を掛けた。

助役がくちを挟んだ。「やすひこくん、いいかね、……ここは公共の場であって、私用をたすところではありません。内輪のことは、あとで村長のお宅でじっくり話合ったらどうでしょう。職員たちへの訓辞がさしそまっているので、ここはまあ我慢をされて……」

「わかったよ、助役さん」と、若者は意外に素直な返事をした。椅子から腰をあげると、かなりの長身で、汗に汚れた衣服のなかみは均整がとれていそうだ。「助役さんのロジックは、まるで強請を相手に、なだめすかしてお引き取り願うみたいだよ。……まあいいさ、せっかくの雰囲気これを以上乱して、また病院に押し込められたくもないし、すぐ出ていくよ。……入るときは、裏口から泥棒猫みたい、帰りは表玄関を正々堂々ってわけ……」